

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：12701
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21530920
 研究課題名（和文） 造形実験装置による巡回式ワークショップ・プログラムの開発研究
 研究課題名（英文） Development study of the patrol type workshop program with The Art Experimental Device
 研究代表者
 大泉 義一（OIZUMI YOSHIICHI）
 横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
 研究者番号：90374751

研究成果の概要（和文）：本研究では、学校や地域施設、地域イベントや美術館などを巡回して造形ワークショップを実践する『アートツール・キャラバン』のための教具装置群、すなわち「アートツール」が創案・製作され、それらによって環境構成された実践プログラムを開発した。このプログラムにおいては、ワークショップに参加する子どもたちが「アートツール」で遊ぶことを通して、自らの感覚を発揮し創造心を奮い立たせることが企図され、ひいては自分の実感から〈いま-ここ〉の場や他との〈関係〉、つまりは自分たちの生活を新鮮にとらえ直すことにつながった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I develop "ART TOOL CARAVAN" which I go around a school and local facilities, the local event or art museum, and practices Art workshop. This program aims at showing own sense through children participating in a workshop playing with "ART TOOL", and bracing creation feeling up. Furthermore, it aimed at catching our life in virginity from one's actual feeling again.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育（国語、算数・数学、理科、社会、地理・歴史、公民、生活、音楽、
 図画工作・美術工芸、家庭、技術、英語、情報）

1. 研究開始当初の背景

(1) 造形ワークショップ実践の新しい形としての側面

本研究では、ピクトル・ダミコが創案した「美術玩具」を参考にする。¹⁾「美術玩具」とは、ダミコが 1940 年代から 50 年代にかけ

て世界各国で実践したワークショップ・エリアに配列された、子どもの五感と身体筋肉運動に訴え感覚を刺激することに基礎が置かれた光と動きを伴った装置である。子どもはその装置に働きかけることにより、自らの感性を高め、創造的な活動への参加が促されるとされた。この「美術玩具」は、1995 年に

東京・渋谷の「こどもの城」で復元された以外、我国においては研究対象として取り上げられていない。

本研究によってこの「美術玩具」の考えを発展させ、教具装置群が環境構成されたプログラムを開発し、様々な場を巡回してワークショップを展開する。このことにより、美術館などの固定化された環境に「美術」があるのではなく、ふだんの子どもがいる環境に「美術」が出向いていくという、ワークショップ実践の新しい形を提案することができる。

(2) 造形ワークショップの教育的意義を子ども視点から検討する側面

現在、様々な場で、子ども向けの造形ワークショップが実践されている。その意義は、主催側の視点に基づく社会学的文脈においては明らかにされているものの、参加側、つまり子どもの視点から明らかになっているとは言い難い。²⁾造形ワークショップに参加したことにより、子どもは何を感じ、どのような資質や能力を発揮し、そして何を成すに至ったのかが具体的に示されていないのである。本研究では、教職志望学生がワークショップ実践における子どもの活動様相を分析・考察することにより、そのことを克服する。

(3) 教員養成プログラム開発としての側面

本研究では、教職志望学生が開発・実践・分析に関わる。そのことは教職志望学生が、学校教育のみならず多様に開かれた場における子どもの造形活動と個別具体的に向き合う機会を提供することを意味する。それにより、イヴァン・イリッチの言う「学校化」された状況から解放された造形活動のもつ教育的意義や文化的ダイナミズムを実感する機会となり、教育実地研究や学校における自らの教育実践活動をより広い視野からとらえ直すことを促すことにつながる。³⁾また、平成 20 年に告示された学習指導要領(図画工作・美術)に新設された〔共通事項〕に示されている内容、すなわち子どもが形や色、イメージなどに能動的に関わっていく様相を具体的に・実感的にとらえることにつながる。

(4) これまでの研究成果の応用・発展

研究代表者である大泉は、これまで美術科専攻学生を対象とした教員養成プログラムの開発研究に下記の通り取り組んできた。

- ① 附属中学校と大学による授業連携の実践
(平成 16 年度北海道教育大学教育実践総合センター調査研究費助成(採択))
- ② 附属小学校と大学の連携によるアシスタント・ティーチャー・プロジェクト
(平成 17 年度北海道教育大学共同研究推進経費による研究プロジェクト(採択))
- ③ 「AE ゼミ (Art Education Seminar)」による「美術的学び」を促すワークショッ

プの開発

(平成 20 年度横浜国立大学若手研究者支援制度に伴う研究費援助(採択))

本研究では、①、②の研究における学生の実地活動を通じた教員養成プログラムの成果、そして③の研究で構築しつつある造形ワークショップに関する基礎的理論枠組みや、学生の組織化を含めた研究体制に関する知見を応用して取り組むものである。

(参考文献)

- 1) こどもの城『ビクトル・ダムコ 一人間性の美術展一』財団法人日本児童手当協会こどもの城、1995
- 2) ワークショップ知財研究会『こどものためのワークショップ』アム・プロモーション、2007
- 3) イヴァン・イリッチ『脱学校の社会』東京創元社、1977

2. 研究の目的

本研究は、教職志望学生が、学校や地域施設、地域イベントや美術館などを巡回して造形ワークショップを実践する「アートラボ・デリバリー (アートツール・キャラバンと改称)」のための教具装置群、すなわち「アートツール」(図 1)を開発することを目的とする。さらに学生と「アートツール・キャラバン」(図 2)の実践を展開し、それに参加する子どもたちの活動様相を分析・考察することにより、ワークショップ実践の教育的意義を子どもの視点から検討するとともに、子どもの造形活動の個別具体的な在り様に対する学生の理解を促し、教員としての資質の向上を図る。

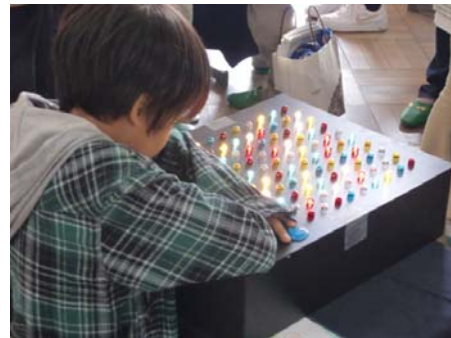


図 1 アートツール『スイッチ』

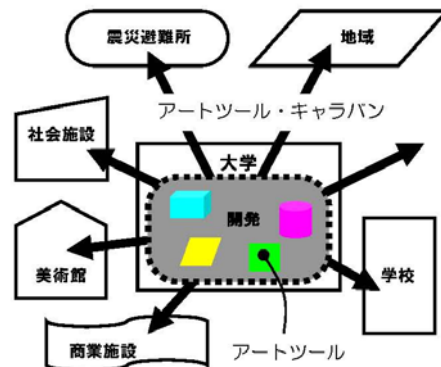


図 2 アートツール・キャラバンのイメージ

3. 研究の方法

(1) 子どもが造形的な実験を楽しむ教具装置「アートツール」の創案・製作

子どもの諸感覚を刺激し、能動的・感性的で実験的な造形行為を促す教具装置「アートツール」を創案・製作する。

(2) 巡回式ワークショップ・プログラム「アートツール・キャラバン」の開発

(1)で製作した「アトラボ・ツール」を構成して、学校や地域施設、地域イベントや美術館など様々な場に赴き実践するプログラム「アトラボ・デリバリー」を開発する。

(3)「アートツール・キャラバン」の実践

子どものいる様々な場を巡回して、(2)で開発したプログラムを実践する。美術館などの固定化された環境に「美術」があり子どもがそこに赴くのではなく、子どものいる環境に「美術」が出向いていく実践である。

(4) 実践における子どもの造形活動プロセスの分析・考察

プログラムに参加した子どもの個別具体的な造形活動プロセスを分析することによって、ワークショップ実践の教育的意義を子どもの視点から検討するとともに、学生の教員としての資質向上を図る。分析にはエスノメソドロジーの研究方法を採用する。

<研究方法7つのStep>

- 【Step 1】 開発・実践に参画する教職志望学生の組織と研究・実践体制の整備
- 【Step 2】 「アートツール」の創案に向けた基礎的理論枠組みの構築
- 【Step 3】 「アートツール」の試行的創案と製作、調査実践を通じた改善と創案
- 【Step 4】 「アートツール」の創案・製作
- 【Step 5】 巡回式ワークショップ・プログラム「アートツール・キャラバン」の開発
- 【Step 6】 様々な場における「アートツール・キャラバン」の実践
- 【Step 7】 実践の分析と考察

4. 研究成果

(1) 平成 21 年度

研究・実践体制を確立し、「アートツール」創案に向けた基礎的理論枠組みを検討した。その上で、第1次「アートツール」の創案・製作と調査実践を行い、その改善と拡充を図った。

① 基礎的理論枠組みの検討

ビクトル・ダミコの「美術教育装置」および「アート・キャラバン」における教育理念と高橋陽一の「反教化的教化」としてのワークショップ理論を相対化し、また原研哉、深

澤直人らによるデザイン理論と実践を参照し、「アートツール」創案の基本原則および要件を以下のように策定した。

<アートツール創案の基本原則及び要件>

I・基本原則

- A・装置性 … 装置として高い堅牢性を有する
- B・目的性 … 子どもの「五感」を刺激し「能動性」を発揮させる
- C・造形性 … 造形として高いクオリティを有する

II・要件

- A・装置性 … ①堅牢性、②イージーメンテナン
ス、③ハンディ、④セーフ
ティ、⑤復旧可能性
- B・目的性 … ①対象、②五感刺激、③能動性、
④手ごたえ、⑤コミュニケーション
- C・造形性 … ①形態美、②色彩美、③素材感、
④丁寧な工作

② 調査実践

NPO 法人 CANVAS、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科(KMD)が主催する、子ども向けワークショップのイベント『ワークショップ・コレクション 2009』にてワークショップを実践した。期間は、平成 22 年 2 月 27 日・28 日の 2 日間で、イベント全体の参加者は延べ 3 万 5 千人、私たちのワークショップには、人数制限を設けたうえで約 800 人もの参加があった。会場には 9 台の「アートツール」を設置し、ファシリテーターとして 13 名の学生メンバーが参画した。この実践を通して明らかになった改善要求をふまえて、さらに様々な場での実践を展開していくこととした。

(2) 平成 22 年度

昨年度において確立された研究・実践体制、そして「アートツール」の創案の基本原則および要件を基に、「アートツール」を創案・製作し、それをを用いて造形ワークショップを巡回的に実践した。

① 実践記録（活動実績）

- 1) 神奈川県茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校にて
上記学校からの依頼により、〈あそぶ〉プログラム及び〈つくる〉プログラムを実施
- 2) 神奈川県立近代美術館葉山にて
同館企画展とのタイアップにより、アートツール『なにがみえるかな?』を用いた鑑賞活動実施
- 3) 神奈川県茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校教職員
実技研修会にて
1)の実践後、同校教員から依頼があり、アートツールのうち『つなげるモバイル』を教職員で製作し、児童たちに自由に遊んでもらえるよう校内に設置
- 4) 横浜市民ギャラリーあざみ野にて

- 上記施設にて〈あそぶ〉プログラムおよび〈つくる〉プログラムを実施した。
- 5) 横浜国立大学附属鎌倉小学校『鎌倉なるとかナーレ』にて
上記アートプロジェクトにおいて〈あそぶ〉プログラムを実施した。
 - 6) 『TRESSA 横浜』(ショッピングセンター)にて
上記商業施設企画部とのタイアップにより、当該施設にて〈あそぶ〉プログラムおよび〈つくる〉プログラムを実施(図3)
(<http://www.tressa-yokohama.jp/>)
 - 7) 神奈川県横浜市立駒岡小学校にて
上記学校からの依頼により〈あそぶ〉プログラムおよび〈つくる〉プログラムを実施
 - 8) 『第7回 ワークショップ・コレクション』にて
上記イベントにて新規〈あそぶ〉プログラムおよび〈つくる〉プログラムを実施



図3 TRESSA 横浜でのATC

② 明らかになった課題

当年度は、実践の展開に重きを置いた。次年度は、実践のリフレクションを行い、本研究の教育的意義を実証的に検証し、その教育的可能性について考察を行うこととした。

(3) 平成23年度

① 様々な場における実践の展開

昨年度に引き続き、様々な場で実践を展開した。とりわけ、以下の実践においては、従前の造形ワークショップには見られなかったプロジェクトの実施形態を推進することができた。

1) 川崎市市民ミュージアムでの実践

本実践は、美術館の教育普及学芸員の依頼に端を発している。さらに当館の意向により、本プロジェクトは、完全に美術教育を専門とする学生たちによって企画・運営された。美術館において、学生達の企画が採用されることは全国的に見ても稀であり、その実践では、美術館空間ならではの子どもたちの活動が実現された。参加した子ども、保護者からの評価、そしてそれを受け

た美術館側からの評価により、次年度も開催することが決定している。

2) 南三陸町立入谷小学校での実践

本研究の実績を認め、キッズデザイン賞(アクション・フューチャー部門)を授与した特定非営利活動法人(内閣府認証NPO)キッズデザイン協議会が主催する東日本大震災被災地に対する教育支援活動プロジェクト『元気プロジェクト』の一環として、宮城県南三陸町の子どもたちを対象にした実践を行い、その意義を検討した。その成果は、キッズデザイン協議会のホームページに掲載されている。

② 実践の分析と考察、引き継がれた課題

実践においては、子どもの造形活動の様相をデジタル・ビデオ・カメラ、ICレコーダー等で記録し、質問紙による調査も行った。そしてそれらデータを基に、子どもの造形活動の様相をエスノメソドロジー的手法で分析し、学校教育における授業とは異なる行動様式、発話様式を析出することができた。

また、本ワークショップの実践が、幼稚園、小学校、高等学校という学校種はもちろん、美術館や商業施設、そして震災避難所や被災地といった、様々な子どもの学び(表現)の場を「越境」して展開されることとなった様相から、造形ワークショップが、多様な学びの場を結束する〈ハブ〉としての役割を果たしていることを確認した。顧みれば、青少年の健全育成のためには学校と地域とがそれぞれの教育的役割を明確にした上で連携していくことが重要であるとされながらも、そのことが実現され難い状況にあって久しい。そうした状況を鑑み、地域コミュニティの教育力を発揮するためにも、造形ワークショップを学校と地域における学びの場を越境するための〈ハブ〉として位置付けることで、子どもの学びに連鎖や往還を生み出すことができるのではないかという展望を見出すに至っている。

以上の成果については、報告書(リーフレット)にまとめて今後において順次公開していく見通しである。

③ キッズデザイン賞の受賞

特定非営利活動法人(内閣府認証NPO)キッズデザイン協議会が主催する「キッズデザイン賞」において、その実績と可能性が認められ、アクション・フューチャー部門賞を授与された。このことにより、今後もキッズデザイン協議会との連携において、実践を展開していく見通しを得ている。

(第5回キッズデザイン賞

http://www.kidsdesignaward.jp/kda_award_2011/)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計6件）

- ① 太泉義一，越境する〈ハブ〉としての造形ワークショップ —『アートツール・キャラバンの実践から』—，美術教育学会通信，査読無，第79号，2012，17～18
- ② 太泉義一，図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究Ⅱ —教職キャリアと「第3教育言語」の関係から—，美術科教育学会誌『美術教育学』，査読有，第33号，2012，135～147
- ③ 太泉義一，知ることは感じることの半分も重要ではない，日本美術教育研究会ニュースレター，査読無，第2号，2011，4
- ④ 太泉義一，無教科書時代における造形教育の調査研究 —ある小学校で発見された構成作品群から—，大学美術教育学会誌，査読有，第43号，2011，66～78
- ⑤ 太泉義一，図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究 —図画工作・美術科の授業を構成する「第3教育言語」への着目—，美術科教育学会誌『美術教育学』，査読有，第32号，2011，54～68
- ⑥ 太泉義一，「子どものデザイン」の教育的意義に関する試論，美術科教育学会誌『美術教育学』，査読有，第31号，2010，125～138

〔学会発表〕（計1件）

- ① 太泉義一，造形実験装置による巡回式ワークショップ・プログラムの開発研究〈アートツール・キャラバン〉，大学美術教育学会東京大会，武蔵野美術大学，2010.9.10

〔図書〕（計2件）

- ① 太泉義一，キッズデザイン協議会，「キッズデザインコンセプトブック 2011」，2011，115
- ② 太泉義一，CANVAS しゅっぱん事業部，「ワークショップずかん」第6回ワークショップコレクション公式カタログ，2009，48

〔その他〕

- ・第5回キッズデザイン賞・アクション・フューチャー部門受賞
- ・ホームページ等
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太泉 義一 (OIZUMI YOSHIICHI)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：90374751

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し